平成 28・29 年度指定

『文部科学省道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援事業』『静岡県道徳教育推進事業』

六合地区小中連携教育研究会　　六合中学校　六合小学校　六合東小学校

1　研究の概要

(1) 研究主題

主体的に判断・行動し、他者とよりよく生きようとする児童生徒の育成

(2) 主題設定の理由

情報化やグローバル化が人知を超えて加速度的に進展している現代では、将来子供たちが就く職業やどういった人生を歩むのかが予測不能である。このような未来を生き抜くためには、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして新たな価値を生み出していくこと、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生を創造していくことが重要となる。一人一人の子供が、こうした人生を送れるよう、私たちは、目の前にいる子供たちにとって必要な資質・能力を丁寧に、そして確実に育んでいかなければならない。

では、六合中学校区３校の子供たちに育みたい資質・能力とは何か。

子供たちのよさとしては、「素直で明るい」「決められたことに一生懸命に取り組む」等が挙げられる。一方で、「状況に応じて、自分で判断し、行動すること」「自信のなさ（自己肯定感の低さ)」などの課題も散見されることから、小中９年間を通して、「自ら考え、行動する」「他者と進んで協働する」「よりよい人間関係を築いていく」等の力を育んでいく必要があると考えた。

このような理由から、研究主題を「主体的に判断・行動し、他者とよりよく生きようとする児童生徒の育成」とし、３校共通の重点を、「自主自律・思いやり」とすることとした。

(3) 研究内容

研究主題及び３校共通の重点の具現を目指し、「児童生徒が主体的に考え、議論する道徳の授業を推進すること」「人との関わりの中で、自主自律・思いやりの心を育むこと」を研究内容の核と位置付け、３校の職員で構成する授業研究部、実践研究部、連携研究部の３部を組織し、研究を進めることとした。各部の主な取組の概要は次のとおりである。

ア　授業研究部

各校の研修主任が中心となり、授業づくりの視点を作成し、３校合同の授業研究、各校における授業実践を通して、常に見直しを図り、道徳授業の質的改善を進めた。

(ｱ) 授業づくりの視点

「ねらいの明確化」「発問の吟味」「自己の振り返りの充実」

(ｲ) 三校合同授業研究会の実施

各校が輪番で会場校となり、授業研究、講演会を実施した。

イ　実践研究部

各校の道徳教育推進教師が中心となり、道徳の時間と各教科等のつながりを明確化し、小中９年間のつながり及び各教科等のつながりを意識した、計画的かつ効果的な道徳教育の推進を支えた。主な取組は次の３点である。

(ｱ) 道徳教育全体計画、別葉、年間指導計画の作成と活用

(ｲ) 「私（わたし）たちの道徳」の活用

(ｳ) 和文化教育に関連した道徳教育

ウ　連携研究部

各校の教務主任が中心となり、主に次の２点に取り組んだ。

(ｱ) 家庭・地域との連携推進

・学校だより及び学校ホームページの活用（保護者、地域住民への道徳教育に関する発信）
・親子道徳の開催（講師を招き、子供と保護者、地域住民が参加する講演会等の開催）
・保護者等への道徳授業公開（保護者、学校評議員、民生委員等への授業公開）

(ｲ) 道徳教育の効果検証

児童生徒、保護者、教員の道徳教育に関する意識調査の実施

## ２　具体的な取組

### (1) 授業研究部

### ア　取組の概要・成果と課題

#### (ｱ) ３校共通の「授業づくりの視点」について

三校合同研究主題「主体的に判断・行動し、他者とよりよく生きようとする児童生徒の育成」の具現化に向け、目指す授業像を「児童生徒が主体的に考え、議論する道徳の授業」と設定し、道徳の授業を実践してきた。授業研究部では「どういう型の授業をすればいいか」ではなく、「どういう視点を働かせて授業をつくるか」に着目した。実際の道徳の授業では、次の３点を「道徳の授業づくりの視点」として授業構想を立て、実践を積み重ね、ポイントとなる事柄を見出し、３校で共有してきた。

| | | |
|---|---|---|
| ・ねらいの明確化 | ・発問の吟味 | ・自己の振り返りの充実 |

#### (ｲ) 六合中学校区三校合同授業研究会について

研究指定を受けたことを機に、３校の全職員が道徳教育についての考えを深めるために「三校合同授業研究会」の場を設けてきた。各校が年に一度会場校となり、年３回行った。授業研究会は、全体会、授業参観、グループ協議、講師の講話などの内容で行った。

#### (ｳ) 成果と課題

○授業づくりの視点として「児童生徒が主体的に考え、議論する道徳の授業」に向け、実践を重ね、三つの視点におけるポイントをシートに追記してきた。「授業づくりの視点」をもとに柔軟に、授業構想をたてる手がかりとすることができた。

・実践から授業を見直し、捉えた課題を補足し、成果としてシートを発展させていくことができた。

・各校とも校内体制として研修の日常化が図られ、授業づくりの三つの視点を中心に職員間で意見が交わされた。

○三校合同授業研究会では、一つの授業について３校の教員でグループ協議し、同じ講話を聴くことを通して、成果と課題を共通理解することができた。積み重ねと今後の方向性について整理され、研究を深化させていくことにつながった。

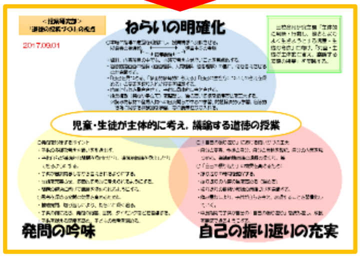
・道徳授業の参観は、小中学校全職員が同じ土俵で参観、協議することが可能であり、参観者が自分の授業を振り返る好機となった。

・児童生徒の発達段階における思考の深まりが授業場面に表れ、９か年の成長を感じ取ることができた。

・学習指導要領に示されている内容項目について、小学校から中学校への発展性や連続性を具体的に考える機会となった。

▲「児童生徒が主体的に考え、議論する道徳の授業」に向け、今後も、様々な内容項目において、質の高い多様な指導方法の工夫を取り入れて実践を積み重ね、授業改善を図っていく必要がある。

▲道徳の授業を通して、六合地区三校の小中連携を継続して深めていくことができるよう、教育課程に反映させていきたい。



(2) 実践研究部

ア　取組の概要・成果と課題

(ｱ) 道徳教育全体計画・別葉・年間指導計画の作成

研究指定を受ける以前は、全体計画及び年間指導計画について、各学校独自の形式・内容で作成されており、別葉については、いずれの学校においても作成されていなかった。

そこで、研究初年度は、３校間で「縦の接続」と「横の連携」を意識した枠組みづくりと９年間を見通した内容の検討を行い、全体計画及び年間指導計画の見直しを図った。別葉については、形式を検討し、３校共通の形式による重点内容項目に絞った内容のものを作成した。

研究２年目となる本年度は、初年度に作成したものを基に実践を積み重ねながら、別葉の見直しに取り組んでいる。今後は、重点内容項目以外のものについて、別葉へ加筆していく予定である。

(ｲ) 道徳の時間と各教科等との関連的指導の工夫

３校では、道徳の時間を要としながら、次のａ～ｃについて取り組むことにより、教育活動全体での道徳教育推進に取り組んだ。

ａ　各教科における取組

各教科等の目標とともに、本時における道徳教育のねらいを明確化し、授業を行った。

例：中学校保健体育科「柔道」、小学校生活科「のりものたんけん」等

ｂ　特別活動における取組

学校行事や学級活動において、活動の目的や目標とともに、活動を通して育みたい道徳的心情、判断力等を意識し、児童生徒に意図的な働き掛けを行った。

ｃ　生徒指導における取組

島田市では、日本の文化を知り、豊かな心を育てることをねらいとして、和文化教育を継続的に実践している。「形を整えて、心を整える」という考え方が３校に息づいており、各校共通実践として、「あいさつ」「だまってそうじ」「はきものそろえ」に取り組んだ。

あいさつ運動

はきものそろえ

(ｳ) 「私（わたし）たちの道徳」の活用

道徳の授業の資料としてだけでなく、学年開きや家庭学習カードなどにも活用した。

(ｴ) 環境整備

道徳教育を支える環境づくりとして、道徳コーナーの設置、図書館支援員との連携等を進めた。

(ｵ) 成果と課題

以下の成果と課題に基づき、今後も道徳教育全体計画・別葉・年間指導計画の見直し等を進め、３校の連携をさらに深めながら、道徳教育の改善と充実に努めていきたい。特に別葉については、段階的に重点内容項目以外の内容項目について記載内容を広げていきたい。

○重点内容項目を意識し、年間を見通した教育活動全体での道徳教育を推進することができた。

- 学級、学年経営、特別活動、生徒指導、他教科等における道徳教育の意図的･計画的な実践を積み重ねることができた。
- 道徳の授業のねらいや重点内容項目を意識して、日常生活における児童生徒の道徳性の表出（行為・行動・習慣等）を見取り、価値付けられるようになってきており、道徳の授業と日常生活の往還が図られるようになっている。

○教員のカリキュラム･マネジメントに対する意識の高まりが見られた。

- 別葉の作成により、意識して道徳の授業、他教科、行事等を横断的に実践することができるようになった。
- 実践のみならず、評価、改善を行うことで、個々（学年）の実践に質的な改善が見られるようになった。

全学年の別葉

▲他教科における道徳教育の実践に厚みを持たせていく必要がある。

- 教科の特性を生かしながら、より意図的・意識的に道徳教育を推進していきたい。

▲「私（わたし）たちの道徳」の授業以外での活用が十分できていない。

- 家庭との架け橋としての活用が考えられたが、十分ではなかった。

### (3) 連携研究部
#### ア　取組の概要・成果と課題
**(ｱ) 地域との連携について**

学校ホームページや学校だよりの充実を心掛け、学校と家庭や地域が情報を共有している。そのため学校行事などには地域の方の参加があったり、その様子を取材し自治会だよりに掲載されたりしている。また、学校だよりには３校共通で『こころの窓』という道徳コーナーを設け、道徳教育に関する内容を地域･家庭に発信している。

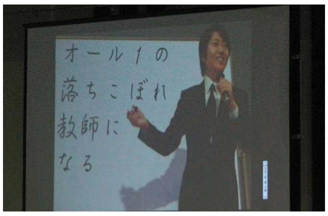
**(ｲ) 家庭との連携について**

<u>親子道徳</u>

児童生徒と保護者が同じ場で講演を聴き、家庭で内容について話し合う機会とした。また、参加できなかった家庭は、児童生徒から内容を聞いて、いろいろな話ができたとの感想を多数いただいた。

<u>六合小</u>

H28「幸せ」を生みだす「やる気」と「優しさ」『自分のなかにある宝物』
国立大学法人鳴門教育大学　久我直人 教授
H29『夢の実現に向けて』ホスピタル･クラウン 大棟耕介 氏




<u>六合東小学校</u>

H28『夢の実現に向けて』ホスピタル･クラウン 大棟耕介 氏
H29『オール１の落ちこぼれ､教師になる』宮本延春 氏

<u>六合中学校</u>

H28『オール１の落ちこぼれ､教師になる』宮本延春 氏
H29『車いすで跳ぶ人生　生きる力、子育て力』濱宮郷詞 氏

<u>授業公開(参観)</u>

３校では授業参観で、道徳の公開授業を行う機会を設けている。保護者の皆様に授業を参観していただき、授業のねらいを説明したり御意見をいただいたりしている。

**(ｳ) 学校間の連携について**

中学生は、朝のあいさつ運動を毎日行っている。時には六合駅や小学校の校門に行きあいさつを交わしている。

夏休みに学習ボランティアを行っている。中学生がボランティアで小学校に行き水泳や算数などの学習をサポートしている。

３校それぞれの学校で授業研究会を行い、事後研修をグループごと行う。その際、指導主事や講師を招いて講演などを聴き研修を深めている。

その他、中学校入学を見据えての入学説明会や小学校へ出向いての「ようこそ先輩」といった交流会も毎年行っている。

**(ｴ) 成果と課題**

○校内のちょっとしたボランティアや地区の夏まつり、運動会のボランティアに積極的に参加するようになり、活動状況も大変意欲的であった。
○地域の見守り隊(登下校の安全を見届けている方々)や地域で出会う方々とのあいさつが自然にできるようになった。
○学校だよりを地域にも配ったり、学校の様子をホームページに頻繁に掲載したりすることでアクセスが増えたり、子供たちの地域での様子を連絡いただく機会が増加した。これは、学校と家庭や地域が情報を共有し、子供たちを育てていく雰囲気ができてきている現れである。
○小学生低学年、中学年、高学年、中学生と発達段階に応じた教育を、９年間の見通しを持って行おうとする職員の意識が一層強くなった。
○職員が小中合同研修会の際、授業づくりや教室環境づくりを学び合い、指導力向上を図る機会が増えた。
▲家庭、地域を巻き込んだ道徳教育の推進の具体策をさらに検討していきたい。
▲地域教材の開発や活用などに、保護者や地域の人々の積極的な参加や協力を得るなど連携を図ることの必要性を検討していきたい。
▲親子道徳のように親子で共通体験することの重要性を家庭に広めていきたい。